

天理大学ふるさと会海外研修報告書

ケニア研修報告書

「音楽教育と孤児院訪問やケニア住民との滞在を通して考える『幸せ』」

天理大学国際学部

外国語学科英米語専攻 4年

藤井清史



目次

1.はじめに

2.研修概要

3.研修背景・目的

4.研修内容

5.考察

6.結び

はじめに

研修生としてケニアへ派遣していただいたこと、心より御礼申し上げます。ACEFの皆様、そして国際交流センターの皆様には、準備段階から研修期間中に至るまで多大なご支援をいただきました。また、家族や友人の支えがあったからこそ、この貴重な機会を実現することができました。ここに深く感謝申し上げます。

本研修は、私にとって単なる海外経験ではなく、自身の価値観や今後の生き方を見つめ直す契機となる重要な時間となりました。

なお、申し込み当時はアメリカに留学しており、限られた時間の中での手続きとなりましたが、国際交流センターの先生方の丁寧かつ継続的なサポートにより、本研修への参加が実現しました。

さて、本研修では、ケニアにおいて音楽教育や孤児院訪問、現地住民との共同生活を通じて、「幸せとは何か」「国際支援とは何か」という問いについて考察することを目的としました。参加のきっかけは、ケニアのスラムに住む子どもたちが、お菓子のグミを手にして心から喜ぶ姿を映した映像でした。物質的に恵まれているとは言えない環境にありながらも、強い喜びを表現する子どもたちの姿に触れ、日本との価値観の違いを強く意識しました。

この経験から、「幸せの根源とは何か」という問いが生まれ、その答えを自分自身の体験として確かめたいと考え、本研修への参加を決意しました。

研修概要

本研修は、2026年2月6日から2月24日までの約3週間弱、ケニアにて実施した。主な研修先はACEF (Africa Children Education Fund) であり、教育支援や地域活動に参加した。活動内容は、学校教育への参加、音楽授業の実施、孤児院訪問、スラム訪問、医療支援活動への参加、環境関連施設の見学、ホームステイなど多岐にわたる。これらを通して、ケニア社会の教育・生活・医療・環境といった多面的な側面を体験的に学んだ。

研修背景・目的

本研修の背景には、発展途上国における生活実態と価値観を理解したいという問題意識がある。特に、物質的な豊かさと幸福の関係について疑問を抱いたことが大きな動機となった。また、大学で国際援助について学ぶ中で、理論と現実の間にどのようなギャップがあるのかを実体験を通して確認したいと考えた。

目的は主に以下の三点である。

第一に、音楽教育を通じた交流を行い、言語を超えたコミュニケーションの可能性を探ること。

第二に、孤児院やスラム、学校などを訪問し、現地の生活環境や教育状況を理解すること。
第三に、現地の人々との関わりを通して、「幸せ」とは何か、「国際支援」とは何かについて考察することである。

研修内容

教育分野において、私立「Tenri」保育園・小学校・中学校の見学、公立小学校での授業参加・見学、ならびに Tenri 小学校における音楽教育および日本語授業の実施を行った。まず、私立「Tenri」保育園・小学校・中学校の見学において、最も印象的であったのは授業の雰囲気である。日本では私語が制限され、比較的統制の取れた環境で授業が進行する印象があるが、現地では全体的に活気があり、自由度の高い雰囲気であった。例えば、授業中に生徒が自ら席を立てて鉛筆を削りに行く、あるいは一言声をかけて教室の外に出るといった場面も見られた。

しかしその一方で、生徒たちは授業に対して強い関心を示しており、集中して教師の話を聞いている様子が印象的であった。授業を楽しみにしている姿勢が見られ、形式的な統制とは異なる形で学習意欲が維持されていると感じた。なお、教師が授業に現れない場面もあり、日本との教育環境の違いを強く実感した。

Tenri 小学校はケニアのエンブ地域に位置し、地域内でも進学校として知られている。そのため、入学に対する意欲が高い生徒および保護者が多く、学習への姿勢にもその影響が見られた。授業は主に英語で行われるが、曜日によって英語とスワヒリ語を使い分ける教育が実施されていた。



次に、公立小学校であるマキマ地域のカニヨンガ学校を訪問し、授業への参加および見学を行った。幼児から高校生まで幅広い年齢層の生徒が在籍しており、私立校とは異なる環境を体験することができた。訪問時には多くの生徒が強い関心を示し、教室に招こうとするなど積極的に交流を求めてきた点が印象的である。

実際の活動は授業参加というよりも交流の側面が強く、生徒たちは終始笑顔で接してくれた。特に幼い子どもたちは一斉に集まり、身動きが取れないほどの状況になる場面もあった。全体として非常に明るくエネルギーに満ちた雰囲気であった。





さらに、Tenri 小学校において音楽教育および日本語授業を実施した。音楽教育では、「If You're Happy and You Know It」を用い、歌唱とボディーパーカッションを組み合わせた活動を行った。生徒をグループに分け、リズムを共有しながら全体で一つの音楽を作り上げることを目的とした。専門的な技術指導よりも、音楽を通じて一体感を生み出すこと、そして楽しむことを重視した。

日本語授業では、五十音の母音および基本的な挨拶（「こんにちは」「ありがとう」など）を指導し、「私の名前は～です」といった簡単な自己紹介表現を紹介した。生徒の多くが強い興味を示し、手にメモを書きながら学ぶ姿が見られた。授業後には多くの生徒からサインを求められ、積極的な関心と交流の深まりを実感した。

これらの活動を通して、教育環境や学習姿勢の違いだけでなく、学びに対する内発的な意欲や、交流を通じた学習の可能性について理解を深めることができた。



次に、孤児院を訪問し、子どもたちの生活環境や日常の様子を直接観察する機会を得た。最も印象的であったのは、子どもたちの明るさとエネルギーである。孤児院に入所している子どもたちは、それぞれに家庭環境などの困難な背景を抱えていると考えられるが、そのような状況を感じさせないほど前向きで、常に笑顔で生活していた。この姿は、自身の先入観を大きく覆すものであった。

生活面においては、日本との違いが多く見られた。子どもたちは朝5時頃に起床し、6時には登校するなど、規則正しく早い生活リズムを送っている。また、夜間には停電が発生することもあり、初めは戸惑いを感じたが、子どもたちはその状況さえも受け入れ、楽しんでいく様子が見られた。

学校がない日には、羊の世話や農作業の手伝いを行うなど、生活の一部として労働に関わっている。一方で、学習に対する意欲は非常に高く、日中の活動後であっても夜には自主的に勉強に取り組む姿が印象的であった。

また、食生活や生活様式においても、日本との違いが顕著であった。例えば、マンゴーを手で食べる、水道水を直接飲むといった行動からは、環境に適応した生活力の強さを感じられた。

これらの経験を通して、物質的な条件に依存しない生活の在り方や、困難な環境の中でも前向きに生きる姿勢について深く考えさせられた。



次に、ナイロビに位置するキベラスラムを訪問し、現地ツアーに参加した。ツアーの一環として、地域の子どもたちへのキャンディ配布や集会所での交流活動に参加した。

まず印象的であったのは、子どもたちの明るさである。スラムという厳しい生活環境にありながらも、子どもたちは非常に元気で、笑顔を絶やさず接してくれた。将来の夢について尋ねると、「先生になりたい」といった希望を語る子どももあり、その表情は非常に生き生きとしていた。

一方で、大人たちの様子は対照的であった。インタビューの中で「最近幸せだと感じたことは何か」と質問した際、「特にない」という回答が返ってきた。日々の生活は非常に厳しく、単発の仕事を探しながら家族を養うことに精一杯であり、幸せを感じる余裕がないという現実が語られた。

実際に訪問した家庭では、6畳にも満たない空間に5人の子どもを含む家族が生活しており、居住環境の厳しさを実感した。こうした状況の中で、子どもたちが持つ明るさと、大人たちが抱える現実との間に大きなギャップが存在していることが強く印象に残った。

また、エンブでの生活では感じなかった緊張感や差別的な態度も一部で見られた。具体的には、アジア人に対するジェスチャーや冷ややかな視線など、地域による雰囲気の違いを体感した。

さらに、訪問中に偶然デモに遭遇し、投石が行われる場面に巻き込まれた。幸い負傷はなかったが、危険を身近に感じる経験となり、日常生活における安全の重要性や、命の重みについて改めて考えさせられた。

これらの経験を通して、同じ国の中であっても生活環境や価値観が大きく異なること、そしてその中で生きる人々の現実について深く認識することができた。







次に、エナ地域にある Tenri 病院を訪問し、現地の医療体制について見学を行った。同病院には内科、眼科、歯科などの診療科が設置されており、地域医療の拠点として機能している。

現地の医師からは、HIV/AIDS に関する現状について説明を受けた。同病院では HIV の治療が無償で提供されており、継続的な支援体制が整えられていることが分かった。

また、偶然にも、ケニア出身で現在日本にて医師として活動している方が無償で実施しているメディカルキャンプに参加する機会を得た。当日は多くの住民が診察を求めて列を作っており、医療へのアクセスの重要性と需要の大きさを実感した。

現場では、ACEF のボランティアとして参加している医学生らが問診や体温測定などの補助を行っていた。一方で、自身には専門的な医療知識や技術がないため、実務的な支援を行うことができなかった。

その中で、せめてできることとして、天理教における「おさづけ」を取り次がせていただいた。日本とは異なり、宗教的行為に対して非常に開かれた雰囲気があり、一人に対して行うと、他の人々からも希望される場面が見られた。

中には「仕事が見つかるように祈ってほしい」と願う人や、幼い子ども、高齢者、病気に苦しむ人々もおり、その切実な状況に触れる中で、深い印象を受けた。一方で、自身が医師ではないことを伝えた際に、複雑な表情を見せる人もおり、自分の行為がどのように受け止められているのかを考えさせられる場面もあった。

これらの経験を通して、「助かってほしい」という強い思いを抱く一方で、実務的に貢献できない自身の限界を痛感し、無力感を覚えた。





次に、環境関連施設として EM 工場および牧場の見学を行い、地域における資源循環や農業の実態について学んだ。

また、ホームステイを通して、現地住民の生活様式を体験する機会を得た。滞在先の家庭は

農地や牧場を所有しており、従業員を雇用しながら農業経営を行っていた。敷地内には複数の建物があり、家族用とゲスト用の住居が分かれているなど、比較的整った生活環境が見られた。このことから、同じ地域内でも経済状況に差が存在していることを実感した。

ホストファミリーの夫婦は非常に親しみやすく、明るい人柄であり、日常生活の中で自然な交流を築くことができた。滞在中は過度な気遣いを必要としない雰囲気があり、安心して生活することができた。また、夜には都市部では見ることのできない満天の星空が広がり、自然環境の豊かさを強く感じた。

さらに、ホストファミリーの職業である保険業の営業現場を見学する機会を得た。営業のスタイルは日本のような形式的なものとは異なり、顧客との距離が近く、友人関係の延長のようなフレンドリーなコミュニケーションが特徴的であった。このような人間関係を基盤とした経済活動は、地域社会における信頼関係の重要性を示していると考えられる。

これらの経験を通して、ケニアにおける生活の多様性や、経済活動と人間関係の結びつきについて理解を深めることができた。





普段は、ACEF「Tenri」の子どもたちと同じ敷地内で生活し、日常を共にする中で継続的な交流を行った。日課として、毎朝天理教の「おつとめ」が行われており、子どもたちは朝から元気に唱和していた。その姿は非常に活気に満ちており、自然と笑みがこぼれると同時に、自身も活力をもらう感覚があった。

日常生活においては、子どもたちは目が合うたびに積極的に挨拶をしてくれ、その純粹さや明るさが強く印象に残った。また、日本語に興味を持つ子どもたちも多く、特にある二人組の生徒は、空き時間になると頻繁に質問をしてきた。彼らは手に直接メモを書きながら学ぼうとするなど、強い学習意欲と主体性を示していた。このような姿勢は、自身の学習に対する意識にも影響を与えるものであった。

遊びの時間には、サッカーやかくれんぼなどを通して交流を深めたが、子どもたちは終始エネルギーであり、その体力や活発さに圧倒される場面も多かった。また、朝6時から夜21時30分頃まで学習に取り組む生活習慣からは、規律と努力の積み重ねが日常の中に組み込まれていることがうかがえた。

さらに、現地の文化体験として、髪をアフリカスタイルに編んでもらう機会もあり、生活を共にする中で文化的な違いを体感することができた。

これらの日常的な交流を通して、子どもたちの内面にある明るさや主体性、そして学びに対する姿勢に触れ、自身の価値観や行動にも影響を与える貴重な経験となった。







考察

本研修を通して最も強く印象に残ったのは、ケニアの人々の持つ「明るさ」と「前向きさ」である。子どもたちや現地の人々、そして日本人スタッフに至るまで、日々の生活の中でエネルギーに過ごしている姿が共通して見られた。挨拶を交わすと必ず笑顔で応じてくれるなど、人との関わりの中に温かさが存在していた。

特に子どもたちの姿は象徴的であった。朝6時頃から夜21時30分頃まで学習に励みながらも、休み時間には積極的に質問をし、手のひらにメモを書いて学ぼうとする姿勢が見られた。このような主体的な学びの姿勢は、日本の教育環境と比較しても強い印象を与えるものであった。

一方で、孤児院やスラム、医療現場を訪れる中で、生活環境の厳しさや経済的な困難も数多く目にした。特にキベラスラムにおいては、子どもたちが希望を持って将来を語る一方で、大人たちは日々の生活に追われ、「幸せを感じる余裕がない」と語っていた。このような子どもと大人の間に見られる認識の差は、「幸せ」が単なる環境条件だけで決まるものではなく、置かれている立場や責任によっても大きく左右されることを示している。

また、医療現場では、自身が専門的な知識や技術を持たないことによる無力感を強く感じた。「助けたい」という思いがあっても、実際にできることには限界があり、国際支援の難しさを実感する経験となった。その中で、ACEFの活動は「人を想う」という信念に基づいて継続されており、支援とは単なる物資や技術の提供ではなく、人と人との関係性の中で成り立つものであると考えるようになった。

これらの経験を踏まえ、「幸せ」とは何かについて改めて考えると、それは必ずしも物質的な豊かさによって決定されるものではないと感じた。ケニアでは、経済的に厳しい状況にあっても、笑顔や前向きな姿勢、人とのつながりの中に喜びを見出している人々が多く見られた。このことから、幸せとは外的条件だけでなく、内面的な在り方や価値観によって形成されるものであると考えられる。

さらに、ケニアでの生活を通して、「環境」が人の意識や行動に与える影響の大きさも実感した。現地には、人々が互いに支え合い、前向きに生きようとする雰囲気が存在しており、そのような環境が人々の明るさや積極性を生み出していると感じた。一方で、日本では必ずしもそのような雰囲気が常にあるとは限らない。この経験から、自分自身がどのような環境に身を置き、どのような意識で日々を過ごすかが重要であると考えられるようになった。

以上のことから、本研修における最大の学びは、「明るく前向きに生きることの価値」と、「人を想う心の重要性」である。強い信念は他者を思う気持ちから生まれ、その積み重ねが行動へとつながる。また、幸せの形は一つではなく、それぞれの置かれた環境や価値観の中で多様に存在している。

この経験を通して得た気づきを今後の生活にも活かし、日常の中で前向きな姿勢や他者への思いやりを意識しながら行動していきたい。

結び

本研修を通して、「幸せ」とは何か、「国際支援」とは何かという問いに対し、自分なりの考えを深めることができた。ケニアで出会った人々の姿から、幸せは物質的な豊かさのみによって決まるものではなく、人とのつながりや前向きな姿勢といった内面的な要素によって大きく支えられていることを実感した。

また、国際支援においては、「助けたい」という思いだけでは十分ではなく、専門性や継続的な関わりが必要であることを学ぶと同時に、「人を想う心」がその根底にある重要な要素であると感じた。

今後、困難に直面し、前向きな気持ちを持つことが難しくなる場面があったとしても、本研修で出会った人々の明るさや力強さを思い出し、初心に立ち返りたい。そして、自身も周囲に対して前向きな影響を与えられる存在でありたいと考える。

最後に、本研修の実施にあたり多大なるご支援をいただいた ACEF の皆様、現地で関わってくださったすべての方々、国際交流センターの先生方、きっかけを与えてくださった先輩および指導教員の先生方、そして常に支えてくれた家族や友人に、心より感謝申し上げます。本研修で得た学びを一過性の経験として終わらせることなく、今後の人生や学びに活かしていきたいです。

